

同和問題（部落問題）とは、被差別部落と呼ばれる地域につながる人びとが、周辺の地域社会から蔑んで見られたり、交際を避けられたりするという問題です。

鎌倉時代の終わり頃、大和国（奈良県）には、後に「えた」と呼ばれる人びとがいて、死んだ牛や馬から、皮革、食肉、^{*1} 膠などを生産していました。彼らは、社寺の祭りの場を清浄な状態に保つ役割も果たしてきました。現代の私たちに容易に理解することはできないのですが、そのようなことができる彼らには、神や仏の世界とかかわりあえる力があると信じられていました。

^{*1} 動物の骨や皮から作られる接着剤。奈良県の伝統産業の一つである書道用の墨は、木や油を燃焼させてできたススを膠で練り固めたもの。

鎌倉時代から室町時代にかけて、大和国では各地に村や町が生まれました。村では、百姓が田畑を耕して生活し、町には商いを営む人びとが集まりました。先に述べた人びとも、周辺地域の人びとと同じように、田畑を持ち、村を形成し、農耕に精を出しました。そして、日常的に周辺の村や町と協力しながら暮らしを高めていきました。その限りにおいて、周辺の村や町に暮らす人びとと彼らとの間には、何ら違いは見られませんでした。しかし、彼らは、先に述べたように、時として周辺地域の人びとにはなし得ないと感じられるような、死んだ牛馬の処理や社寺の祭りの場を清浄な状態に保つ役割をしたので、周辺地域の人びとは、彼らに対し自分たちとは「違う」という思いを強くもっていたのではないかと考えられます。

江戸時代の後半になると彼らの村では、皮革や皮を加工した履き物生産などの産業が盛んになり、仕事を求めて多くの人びとが移り住んでくるようなところも出てきました。これらの村では、農業を中心とした周辺の村むらにはない戸数・人口の増大といった変化が見られるようになっていきました。これにより、彼らの村の景観や生活が変化していきます。その様子を目にした周辺地域の人びとは、それまで感じていた「違う」という思いを一層強め、やがて、彼らとの交際を避けるような、今日の部落差別につながる社会意識をもつようになったのではないかと考えられます。

明治時代になっても、被差別部落に対する差別意識は容易に変化しませんでした。1871（明治4）年に「解放令」^{*2} が出されたことや、自由・平等といった新しい思想が広まっていったことにより、被差別部落の内外に積極的に差別をなくしていこうという考え方が生まれてきました。

^{*2} 「えた」などの呼び方を廃止し、身分や職業を平民と同一にするとした法令。これによって制度的な差別はなくなったが、差別的な意識や実態は解消されなかった。

さらに、明治時代の中頃から資本主義経済が定着し競争が激しくなる中で、暮らしに困る人びとが増える被差別部落も見られるようになりました。古くから農

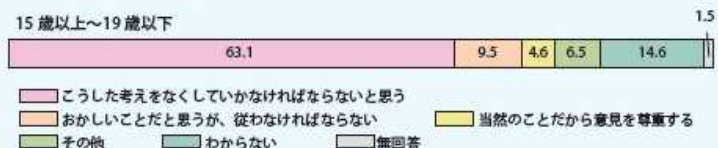
業を営んできた人びとの暮らしは安定したものでしたが、皮革や履き物産業の仕事に従事していた人びとの収入は、好不況の変化に影響を受けやすかったためです。このことから、差別をなくすこととともに、被差別部落住民の生活の改善や向上が大きな課題となっていました。

明治時代の後半から全国各地の被差別部落で差別をなくそうとする取組が始まり、奈良県でも1912（大正1）年に、被差別部落

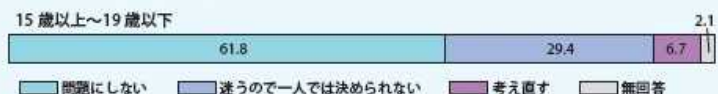
の指導者によって大和同志会が結成され、さらに1922（大正11）年には、奈良県の被差別部落の青年たちが原動力のひとつとなって全国水平社が結成されました。

その後も、さまざまな取組が続けられ、被差別部落を取り巻く環境は大きく変化しました。しかし、最近の意識調査の結果からも分かるように、今なお、部落差別は人びとの意識の中に残っています。

Q. 結婚にあたり、本人たちの責任でないことを理由にして、周りから反対されることについて、あなたはどのように思いますか。

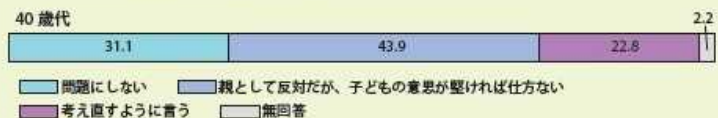


Q. 望ましいと思われる条件を備えている結婚相手が同和地区の人であった場合、あなたはどのような態度をとると思いますか。



(資料：奈良県 若者の人権意識調査（平成24年）)

Q. 望ましいと思われる条件を備えている子どもの結婚相手が同和地区の人であった場合、あなたはどのような態度をとると思いますか。



(資料：奈良県 人権に関する県民意識調査（平成21年）)